



医学生・初期研修医のための

JUA Newsletter

for Next Uro-Generation

5

JAN. 2020

Contents

● 医学生・研修医へのメッセージ

医学生・研修医へのメッセージ

若い泌尿器科医に期待する

名古屋市立大学理事長
名古屋市立大学学長
郡 健二郎

人生を二度送れるとすれば、1回目の経験を活かすことだろう。現実には、孔子が論じた「温故知新」により、私たちは人生を豊かにしている。先人からのアドバイスはその一つで、本企画はその観点からも意義深い。これらを踏まえ、将来を担う皆さんに期待を込めてささやかなアドバイスを送りたい。

私からのアドバイスは、限られた紙面にすべて語りつくせないで、「二つの著書」を紹介したい。一つは、「若い研究者のために」(内藤記念科学振興財団、2019年発行)で、81名の著名な研究者が時空を超えて経験談を語っている。二つ目は、私が数年前に上梓した拙書「科研費 採択される3要素」(医学書院)で、その第1章に10項目の考えを独断と偏見で述べた(図1)。どちらの著書も、優れた研究をするための指南書だが、臨床においても、また深みのある人生を送るためにも役立つと思う。

ここで、二つの質問をしたい。

「30年後には、社会や医療界はどのようになっているか？」

「その時、貴方はどのような医師あるいは医学研究者になっているか？」

この質問を通して私が言いたいのは、皆さんには国内外の潮流を見極め、大きな目標を抱いていただきたいことである。このような偉そうなことを言う理由は、私の若い頃を振り返ると、楽しく臨床と研究をし、私生活を漫然と送っていたが、その後歳を重ねるにつれ、人生の節目にもっと大きな視野を持ち挑戦的な行動をしていたら、と思うからである。(図2)



図1 『科研費 採択される3要素』より



図2 紫綬褒章受章 (平成20年5月)



皆さんが泌尿器科医になったのは正解だが、問題なのは30年後にどのような泌尿器科医になっているかである。30年後には現在の医療や社会環境は変わっている。その変化にいかに対応するかが大切である。進化論者ダーウインが唱えた、「この世に生き残る生物は、強いものでも賢いものでもない、変化に対応したものだ」は示唆に富む。

さて、前述の質問に独創的で先駆的な回答をするには、多様な情報を得て、深く分析することである。30年後を展望し、医学・医療のことだけでなく、異分野の進歩に関心を持ち、超少子高齢化や産業構造など、さまざまな社会環境の変化を見極め、国際状況の動向を読み解き、適切な対応策を洞察することである。

医療については、外科医の父、フランスのパレが16世紀に確立した治療法はダビンチ手術により大きく変わったように、30年後には新たな治療法が創造されているだろう。また100人に一人が医師になる時代にあつて、エリートとしての医師像を変える柔軟さと勇気が必要だ(図3)。皆さんには、これらの変化を引き起こす先駆者になっていただきたい。

100人に1人が医師になる時代

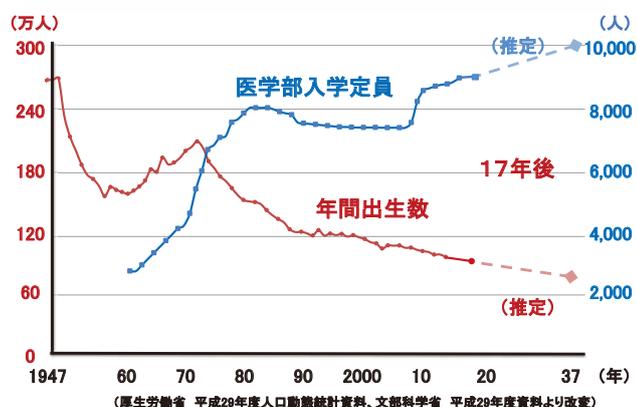


図3

社会については、現在目指している社会はSociety5.0だが、興味深いのは、Society1.0(狩猟社会)から2.0(農耕社会)、3.0(工業社会)、4.0(情報社会)、そして5.0まで進化した時間は指数関数的であることである。この加速度的な流れは今後とも続くので、30年後にはSociety6.0どころか8.0にすらなっていないでも不思議ではない。

そのような社会は誰も予想できず、それを称して「不確実な時代」と言うが、不確実な時代だからこそ、皆さんには、新しい時代を切り拓き、時流にいち早く乗っていただきたい。それをなし得る術(コツ)を、先人から学んだことを参考にしてキーワードのみ列挙する。

回り巡る運を掴む、教養を持つ、流行りの研究や臨床をしない、良き指導者と同僚に恵まれる、固定概念にとられない、好奇心と若さを持つ、実現させる継続性と忍耐力を持つ、何事にも感謝する、不平不満を抑える、などである。そして、私が最も大切だと思うことは「人間性」で、他人を思いやる優しさや愛情で、社会に貢献することである。

最後に、前述の2つの著書に加えて、2つの箴言を紹介する。一つは、徳川家康の「人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如し」で始まる遺訓で、加速度的で皮相的になりがちな現代にも通じる勇壮な考えだ。二つ目は、サミュエル・ウルマンの詩「Youth(青春)」にある「信念、自信、希望」で、皆さん自身に備わっているかを常に自問したい。どちらも短いので原文に目を通していただきたい。

最終学歴

昭和48年3月 大阪大学医学部卒業

職歴

昭和49年7月 東大阪市立中央病院泌尿器科医員
 昭和52年1月 近畿大学助手 医学部泌尿器科
 昭和60年4月 日本学術振興会特定国派遣研究員および British Royal Societyとの交換研究員として南マンチェスター大学(英国)に留学
 平成5年9月 名古屋市立大学教授 医学部泌尿器科

平成13年4月 名古屋市立大学病院 病院長(兼任)
 平成17年4月 名古屋市立大学大学院 医学研究科長・医学部長(兼任)
 平成26年4月 公立大学法人 名古屋市立大学 理事長・学長
 平成29年5月 一般社団法人公立大学協会 会長(兼任)

受賞

平成16年11月 日本医師会医学賞
 平成20年5月 紫綬褒章



医学生・研修医へのメッセージ

チャレンジする医学生・ 研修医にエールを送る

昭和大学医学部泌尿器科学講座 講師 前田佳子

私は縁あって2017年3月より公益社団法人日本女医会の会長に就任しました。以後は医師として、女性として、人間として日本の性差別を解消するために様々な女性団体と協力して活動してまいりました。

日本女医会は1902年に公許女医第12号の前田園子先生を中心に創立され、今年で118年を迎えました。設立時の理念である「女性医師相互の研鑽、親睦および地位の向上」に加え「福祉の増進、地域医療および関連団体との社会活動」「国際交流と親善」が活動の3本柱です。1969年に社団法人、2012年には公益社団法人の認可を受けました。女子医学生と女性医師支援としては2007年から「医学を志す女性のためのキャリア・シンポジウム」を開催し、ジェンダー平等を実現するための意識改革の重要性を訴え続けています。

世界で初めて医師の資格を取った女性はイギリス人のエリザベス・ブラックウェルでした。アメリカの医科大学を卒業して資格を取りましたが、アメリカでは就職できず、イギリスに戻って職を得ました。これは女性医師の歴史の始まりでもあ

り、苦難の時代の幕開けでもあったのです。

日本で初めて医師の国家資格を取った女性は荻野吟子でした。夫から移された性病の治療で屈辱的な体験をした彼女は医師になることを志しました。紆余曲折を経て1882年優秀な成績で私立医学校を卒業したものの、女性という理由で3年間も国家試験を受けることができませんでした。1885年ようやく受験を許され医師国家試験に合格して医師になった後も、医師のみならず社会における全ての女性の地位向上のために尽力を続けました。

性別や年齢にかかわらず、いつの時代にも世の中を変えるはじめの一步を踏み出す人がいます。本人にとってはもちろんの事ですが、そのチャレンジは後に続くたくさんの人たちに道を大きく開くこととなります。医師の世界ではそれがエリザベス・ブラックウェルであり、荻野吟子でした。

日本の女性医師のはじめの一步から133年が経過した2018年8月に医学部女子受験生の入試差別が明らかとなりました。すでに法律で解決されたと思われていた日本における女性の学ぶ権利は、残念ながら守られていなかったのです。2017年における女性医師の比率は、ヨーロッパの主要国では40%を超え、すでに50%を超えている国も散見される。米国では36%とやや低く、残念な事に日本は21%とOECD加盟国では最下位をキープしています。女子医学生の比率を見れば、日本もいずれは女性医師の比率が30%になると思われますが、世界の国々からは大きく遅れを取ってしまいました。

日本は医師の働き方改革に着手し、4年後には法律が施行されます。今後増えていく女性医師のために、出産後も子育てしながら働ける環境を整えるには絶好のタイミングと言えます。

日本泌尿器科学会は2014年に男女共同参画委員会を設立し、2019年から「ダイバーシティ推進委員会」に名称変更を行い、社会環境ならびに医療の多様化によって生じた女性医師、育児・介護等を行う正会員の問題について検討するとともに、適切なキャリア支援を行いグローバル化に対応することで日本泌尿器科学会の発展に期することを目



的として活動しています。今後は新委員長の宮澤克人先生の下、ダイバーシティ&インクルージョンの精神に則り、世代、性別、国籍、身体的・精神的個性などの差異を超え、会員全員が能力を存分に発揮でき、お互いの尊厳を守り価値観が尊重されるシステムの構築などを、委員が一丸となって推進してまいります。

もちろんこれは医師に限った問題ではなく、日本全体の不平等の問題と捉えるべきです。2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標であるSDGs

(Sustainable Development Goals)は、持続可能な世界を実現するための17のゴールから構成され、5番目に掲げられたゴールがジェンダー平等の実現です。女性が半分を占める世の中において、この目標は残りの16の目標全てに関わっている根幹をなすものです。SDGsは地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind) ことを誓っており、日本もこの世界基準に頭を切り替えていかねばなりません。

これから泌尿器科医として羽ばたこうとしている医学生・研修医の皆さん、医療人としては勿論のこと、一人の人間として差別のない社会の構築にむけてチャレンジを続けてください。心から応援しています。

